

受賞のごとば

と悶々としながら、気がつけば40代。書けずにいた自分に一石を投じる様な思いで応募しました。思いがけず実を結び、書くことに勇気をもらいました。ありがとうございます。

優秀賞



西尾市寺津町

小林博美さん

無造作に開けてしまった封筒が、まさかの受賞を知らせるものだと思つた時、思わず「ヤッター」と家族の前で歓喜の声をあげました。自分の受賞など到底頭にはなかつたので、とても驚いています。

”おっばいさん”のエピソードは、人に話すと誰もが笑って下さるので、文章に起こしてみようと思つたのが応募のきっかけです。何か書いてみたい

優秀賞

おっぱいさん

愛知県西尾市 小林 博美

「おっぱいさん」とは、まぎれもない私のおっぱいのことである。母乳で育てた我が子は、おっぱいが大好きで、好きすぎて「おっぱいさんと結婚する」と言う始末。もはや、体の一部ではなく、愛すべき存在になっちゃったのだ。このままでは卒乳するのに苦労するだろうと、子が言葉を何となく理解する様になつてから、おっぱいさんは乳頭温泉で働く中居さんなのだ、と言いついてきた。たまたま、あなたのところ

へ出張してきているのだと。行ったことのない、どこにあるのかもよく知らない、ただ名前だけを知っていた格好の名前の温泉郷。そんなだったら夢がある、なんて思いながら頑としてその設定を変えずにきた。そもそも、体の一部であるおっぱいが温泉郷で働く中居さんであるという設定そのものに無理があるのは百も承知。しかし子どもは見事なまでに信じてくれる。疑ってかかることに慣れきってしまった、すっかり大人になつてしまった自分としては、その信じる力がむしろ羨ましい。子育ては、自分がかつて持つていたであろう素直さや、信じる心を見せられ、自分が失くしていることに気づきを与えてもらう「再学」の機会なのだと思う。与えるばかりと思つていた親の役目とは勘違い甚しく子から与えられるものはきつと計り知れない。そんな考えに浸る日々を過ごし、いよいよ子の卒乳計画を実行する時がきた。おっぱいさんを出張の身にした意味がようやく発揮される時がきたのだ。

おっぱいを飲みながら眠りにつく我が子の耳元で、「おっぱいさん、そろそろ乳頭温泉に戻りたいと申し出られているから、帰してあげようか」と囁く。知恵のついでに我が子は、「おっぱいさんたち、どうやって帰るの？」と言うので、「バスで帰るのよ」と私。

「おっぱいさんは英語でバストと言うの、バスでやって来るからバスト、なんだよ」と、まあ、出てくる出てくるいい加減な物語り。横で夫が冷笑を浮かべるも、子は「ふうん」と学ぶべき素直さで納得の様子。一緒に帰ると言い出さないか心配であったが、無用であった。もう、言い出さないのは乳離れが知らず知らず進んでいるのかと期待の気持ちも入り交じる。

そんなある日、主人が「今までおっぱいさんが尽くして下さったから、お礼がてらおっぱいさんの働く乳頭温泉郷へおっぱいさんを送り届けながら行ってみよう」と言う。子は、色々なおっぱいさんに会える、と自分勝手な想像世界に大はしゃぎ。色々なおっぱいとは何ぞや、と思う反面、子の信じる力が描き出すありえない世界が、ありえたら、と思うと楽しい気分になった。

実際に訪れた〃おっぱいさんの故郷〃は、その名にふさわしく白濁とした、何とも肌あたりの柔らかな優しいお湯だった。無論、色々なおっぱいさんも居なければ、私のおっぱいも私の胸にある。いや、いる、と言うのが正しいのか。

子は、「おっぱいさん帰らないじゃん、ママの胸にあるじゃん」と言うので、卒乳計画はいよいよ最終段

階へと突き進む。

「もう、あなたに熱心に栄養を与えるおっぱいさんのお心は、乳頭温泉に帰ったんだよ、あなたが見ているママのおっぱいは、かつて一生懸命あなたを育ててくれたあのおっぱいさんとは違う、見た目だけそっくりなただのおっぱいなんだよ」と。子はきつと、私の言うことなど信じたくなかっただろう。しかし、それから少しずつ〃おっぱいさん〃がなくても眠れる様になり、卒乳はほぼ完了した。

〃おっぱいさん〃長い間お疲れ様でした。

今だに、おっぱいを触ったり、顔をすり寄せたり、においをかいだり…とまあ、子の精神安定剤となり続けている、おっぱいさんの存在の偉大さに感服するばかりである。